

リレーコラム 11

キャリアの積み方—私の場合

男ですが、育休頂いても よろしいでしょうか？

大城 征

「お母さん。ほうれん草を食べさせましたか？」「…いいえ。」「では、海苔は食べさせませんでしたか？ 佃煮のりとか。」「…いいえ。」救急に「便が緑色なんです！」と生後2か月の赤ん坊のオムツを持って飛び込んできた母親に、子育ての経験がない医者2年目の私はそんな質問を真剣に投げかけていました。当時は今ほど気軽にネット検索ができるような環境ではなく、頼りになるのはポケットマニュアルと診察室に積まれた分厚い教科書くらい。それらのどこにも“緑色の便”についての答えは載っておらず、母親と一緒に「なんですかね～」と首を傾げていました。

それからしばらくして私は育児のため半年間の休みを頂きました。娘が生後8か月の時です。替わって内科医の妻が職場復帰したので、家事・育児のほとんどを引き継ぎました。妻の睡眠を妨げないようにと、深夜にぐずる娘を屋外へ連れ出しひたすら車の往來を眺めたこともあります。夜間救急外来では“ずっと泣いていて、どこか悪いのではないかと心配”と来院され、診察時にはスヤスヤ寝ているということを何度か経験したことがあります。実際我が子に1時間も泣かれると、「誰かお願い！なんとかして！！」と思ったものです。しまいには自分からも母乳が出るのではないかと妄想するに至りました。

育児休業中は教科書からは得られない多くのことを学びました。復職してからは「どうしてこんなことでわざわざ受診するの？」と思うことが極端に減り、「わざわざこの時間に受診する理由はなんだろう？」と思えるようにもなりました。育児の経験から母親に共感を与えるとともに適切にアドバイスができるようになってきたとも思います。投薬にしてもいろいろ考え方が変わりました。

休職には様々な理由があると思います。しかしその経験は復職してから必ず臨床に反映できます。仕事との両立が難しくても、その環境を改善するためにはどうしたらいいのか、一緒に模索して頂けるだけでも大きな役割となります。母親医師の苦勞を10分の1も理解できていないかもしれませんが、このコラムへご招待して頂いたのも何かのご縁と思い“イクメン”の先陣を切らせて頂きました。拙い文ですが、読まれる方の一助となれば幸いです。

大城 征 H15年卒

(おおしろ ただし)

沖縄で小児科勤務医をしています。子供3人、妻1人。

育休は1人目の時だけ。趣味は料理と洗濯と掃除。

よく「A型でしょ?!」って聞かれるが、ズバリA型。

おうちが大好き。

男女共同参画推進委員会より

「男性の育児休業」政府の仕事と家庭の両立支援対策の一つに“イクメンプロジェクト”があります。男性の育児休業取得促進など男性の子育てへの関わりを促進するために様々な制度が整備されてきています。しかし、“イクメン”という言葉は社会に浸透してきたものの、平成27年の男性の育児休業取得率は2.65%と依然として低く、プロジェクト開始後もわずかな伸びにとどまっています。男性の育児参加には、まだまだ社会の理解が十分ではない側面もありますが、厳しい労務環境の中で、支援される側ではない勤務者の負担が大きいことも原因の一つだと思われます。勤務医のうち47.2%は年休を3日以下しか取得できておらず、小児科医の39.5%が週60時間以上勤務し、小児科医の21%が宿直を月に5回以上しています。一般の会社と違って、代務者の確保が難しく、24時間365日業務がある勤務医ではチーム主治医制など独自の取り組みで、男女を問わず普通に育児休業や年休がとれる労務環境を整備していくことが必要と考えます。